





榮花物語系圖



宇多天皇 月の人々此巻より

醍醐天皇 才一のみこ月宮事より

敦實親王 一系より六系宮より
母醍醐同

雅信

母特平公女花守事より
右之長天元三年右之長より
の事よりつらみより同正暦
四年七月廿九日薨より
是たよりより

時通

りぬまつくのよきことおれ
日しきよて平

小女将

たよのひしきよあま有

時叙

こゆしきよと、おれ大系
入通し玉のひしきよに

鳥舞のま、わり

時中

こゆのま、よとんとの
春よて中納言

羽任

源宰相沙玄のま、よと
てんとれま、ちりやうのこ

女

てんとのま、江一系院女二まめと
満る内侍田も、まのゆかると蔵
ま、ま、ま

師良

どんりのま、よとんとのま、よ
兵部左衛

俊義

ろふたのま、ねと九郎の
弁とま

経頼

ろふたのま、則理れ、お方江、東院
大納言とて作道長、ま、ま、人

女

雅通

時通子や

初花乃巻、おねまのひ、菊の巻、
ま、ま、おねまのひ、つて、お、平

女

てんとのま、よとんとのま、ま、ま
ゆめのと、中納言と、同

女

祇園寺の御所あり
ゆめたんとあり

淵信

さゆくの巻に家あり
の巻に仁和寺の巻に

少将

よしとあり

女

さゆくの巻にあり
さゆくの巻にあり
さゆくの巻にあり

女

道徳の巻にあり
さゆくの巻にあり

女

後平頼朝の巻にあり
さゆくの巻にあり

重信

六条の巻にあり
右大臣の巻にあり

寛朝信

さゆくの巻にあり
さゆくの巻にあり

某

右大臣

道方

師中納言の巻にあり
布引の巻にあり

女

隆家
さゆくの巻にあり

經長

てんをまるとして藏人并目をして
味長友種名のまるとして源朝之

經信

平合のまるとして源守を連
まのり一のまるとして中朝之種名
まはくは福のまるとしてつるあ
もるとしてちを并ありのまると
皇所文のまるとして

俊賴

まのれまるとしてこれまるとして
刑尸少輔

高明

村とれ御代の中をまるとして源氏
成給康保也た右安和三年
三月止六日太宰権帥同時が
まるとしてまるとしてまるとして
つるあとのまるとして源朝之を

經房

月のまるとしてまるとして又まるとして
右平へ下御年十三計とまるとして
りとのまるとしてまるとして源朝之
同まるとして大貳源朝之のまるとして

實基

御堂のまるとして源少輔
後柄のまるとして中朝

女

良頼小方

女

うらりきききききき

俊賢

御察のきききききき

女

道長室代明新 婚

女

月宮あはる百極きききき
文此御察とる名文作
りのおりてあきあき
為年親と室きんとの取
きり給

女

正光室つりて記きききき

頭基

御察あはる右進おの家の
きききききききききき
宰相おのりきききききき

資經

母成女被合のきききき
りききき

家方

松崎一は之城きききき

隆國

きききききききききき
きききききききききき
文のきききききききき

義濃守

孫合乃者よみ狂

女

孫合乃者よみ狂

女

孫合乃者よみ狂

隆俊

孫合乃者よみ狂

女

孫合乃者よみ狂

隆總

孫合乃者よみ狂

某

孫合乃者よみ狂

女

孫合乃者よみ狂

女

孫合乃者よみ狂

前坊

孫合乃者よみ狂

基平親王

孫合乃者よみ狂

女

兼道宮田融院姫子母

代明親王

中務

保光

月宮ありて白くを備
ゆきの中物をみそめま
あつてしる

女

義孝通経と記しる

重光

こゝろのまゝして保中物を
しるしをそとらしは酒を

女

村との常月の宮あり
まけいせん

女

頼志宮と向くまゝを
む村さくのまゝよ石と

女

伴中宮記しる

長經

袂合ありてゆるり

女

袂合ありて後冷泉院
ゆめと目まよまふ文の

則理

初記のまゝを記し
そかりしをそられり

女

敦康親と記しる

女

伊田室へ嫁し武蔵守をなす

いせのまゝの三葉流皇居
まゝの太刀をたてしむ

行明親王

朱雀院

寛明親王月宮ありて在

女

女五世御月宮ありて皇孫
日親と曰ふくして冷泉院
まゝの太刀ありて皇孫
乃時御中とて天延元七
月一日皇居をたてしむ

重明親王

女

月宮ありて皇孫と曰ふく
しむくくくくくくくくく
母師資女月宮ありて在
御あり

女

母月胡光室に在りて在

女

村と常月宮ありて在

有明親王

女

仁義公室

女

兼道室胡光の母

村上天皇

成明母朱彦院同

成明親王

兼明親王

月宮女をては信源氏より
あり給

康子

師補公密に通後室を母

廣平

母氏元方女月宮女をて
延世同女をてしと給

治泉院

母師補女安和二年八月卒

ありぬいもの事とて寛弘八年
十月大御前

致平親王

母在衛女をゆく此女を
今とてぬ多事とて入るて九
と一不任給

成信

母雅信女をらかりの事い
ゆきとて海平お美補のむと

水圓

いづく此女をてお家ら
一不任給りとの事此女を
三升守れ増部とてまの
る此女を三位同女をて三升守れ
あつるの事一不任とて三位守れ
とあり

為平親王

頼定

女

女

憲定

女

女

女

女

女子

一、母或る母師補女月宮を
して元服

母三明女初花のちして勢の
多人のちして志家女まの
まのちして西宮とて存つる
花のちして歌芝の女、兼
香殿、帝よひい給

母兼香殿、帝よひい給
室

母、一、ち、れ、り、の、ち、を、て
後、兼、在、院、の、ち、を、て

母、一、ち、れ、り、の、ち、を、て
同、ち、を、て、平、の、ち、を、て

一、ち、を、て、平、の、ち、を、て

母、一、ち、れ、り、の、ち、を、て
兼、在、院、の、ち、を、て、
兼、在、院、の、ち、を、て、
兼、在、院、の、ち、を、て、

母、一、ち、れ、り、の、ち、を、て
中、務、具、平、親、王、室

一、ち、を、て、平、の、ち、を、て

母、一、ち、れ、り、の、ち、を、て
兼、在、院、の、ち、を、て、
兼、在、院、の、ち、を、て、
兼、在、院、の、ち、を、て、

母、一、ち、れ、り、の、ち、を、て
兼、在、院、の、ち、を、て、
兼、在、院、の、ち、を、て、
兼、在、院、の、ち、を、て、

圓融院

母月北宮女として皇女日
出として沖位花の巻として永祿
二年八月廿七日卯の向く時
して永祿元より入る也分信
皇融院よとて也信同也と
正暦二年二月十二日崩

一条院

母兼家女花山女として永祿二
年八月廿七日卯の向く時
寛弘二年六月沖位花の
の巻として沖元服として
乃とてなりわ日とて
御出家寛弘八年六月廿
二日崩

敦康親王

母道隆女らくくの巻として
らる記の巻としてあつたの巻
同とてして伸文とてして
右とてしてあつたの巻
とてしてなり

女

母具平親王女ゆつての巻
して相伝の巻としてなり
とてして板兼在院の常
代とてなりとの巻として
兼在院の巻としてなり
とてしてなり

女

母但子守則理女秘谷の巻
してなり

後一条院

女

母道長女
いづれものちてまふは年少

母后女

てん上御書を御書に同書して
一書文を御書に御書に
後冷泉院訪西時入日使各局
わく御書に御書に御書に
文同書わく御書に御書に

女

母后

てん上の書して御書に御書に
御書に御書に御書に御書に
いづれものちてまふは年少
の書して後一条院を御書に御書に
入日松のつきの書して御書に

同書わく御書に御書に
わく御書に御書に

後朱雀院

女

母后

御書に御書に御書に御書に
いづれものちてまふは年少
の書して後朱雀院を御書に御書に
わく御書に御書に御書に

母道隆女

いづれものちてまふは年少
わく御書に御書に御書に
わく御書に御書に御書に

女

母 日
くろ龍をくくうきね

後冷泉院

母 道長女

うきり身金として流され
まつりのおくくくまき
うきり身金として流され
内位水うきり

後三条院

母 三条院の系文

後冷泉院の系文
十二カ松のつきのまき
四位四年元日まき
とくし内位水

女

母 日

くろ龍をくくうきね

女三宮

母 日

くろ龍をくくうきね

女三宮

母 敦康親王女

祐子日親王とく

女三宮

母 日

くろ龍をくくうきね
のくろ龍をくくうきね
子日親王とく

女五文

母穆宗女
よりりの後のきよみ書に
松のきりえのきよみり
内親と

若文

母教通女
神合のきよみり

若文

母実徳女
日也

若文

母秋院
きりりの後のきよみり

若文

母秋院
日巻のきよみり

白河院

母成女
まわれきりえのきよみり
日巻のきよみり
小のきりり

若文

母秋房女
布川のきよみり
日也

教文

母東山院も人

白河院

母秋房女
延正のきよみり
日也
元治四年八月

女一

母曰

布川をわく赤院曰くし
かりとせ給郁き方の候と申

女二

母能長女

ひさ紀のきわく母文

女三

母能房女

ひさ紀のきわく母院

女四

母曰

實りてきしし四葉文書給

女五

母基平女

松れきつえのきしんきま

ひさ紀のきしんきま

女六

母曰

松のきつえのきしんきま
のゝあわく山元服

女七

母成女松つえのきしん

一お文とす母文よお家

女八

母能信

きつりつららのきしん

女九

母成女

おろきしんきま

女三女

母
おりのまろえはまろしき音
まろく居よ如給

女八宮

母
おのまろえはまろしき音

昌幸

母師尹女
月のえんのまろしき音

具平親王

母代明の沖女
こゆくはまろしき音
中務文とまろしきのま
おくしき音

師房

母為平親よまろしき音
後悔まろしき音長吉三位
中将房のまろしきの音
源中助まろしき音
うまろしきの音
乃このまろしき音
元合まろしき音
まろしき音三位まろしき音
おのまろしき音
おのまろしき音
おのまろしき音
おのまろしき音

為成

母日
おのまろしき音

女

母曰

くら花あかく頼乃の室は
みりのまよふ屋とまよふ
ひらたのまよふまよふ年
かや

女

母曰

玉村まよふのまよふ教康親と
室はみよふまよふまよふを
尸神合のまよふまよふ

女

母曰

玉村まよふのまよふ入道不
文の屋まよふ神合のまよふ
ありたの家まよふ

女

てん上れまよふ頼通通
神まよふ神合のまよふまよふ
まよふ神合まよふ

後房

母道長女

はらあまよふまよふまよふ
てまよふの後のまよふ新
中納まよふのまよふえん巻
まよふ大納まよふまよふ

女

志實まよふ

ひらまよふまよふまよふ

弘房

母曰

袂合をよして左道中ね松乃志つゝの志と満し
左志つゝの志と満し
の志と満し
白河文の志と満し
志と満し

母隆後女

師言はるまの志つゝの
志つゝの志つゝの志つゝの
志つゝの志つゝの志つゝの
志つゝの志つゝの志つゝの

母後志家院合物

志つゝの志つゝの志つゝの

師忠

母於女

志つゝの志つゝの志つゝの
志つゝの志つゝの志つゝの
志つゝの志つゝの志つゝの

仁覚

法性寺の志つゝの志つゝの

母道長女

志つゝの志つゝの志つゝの
志つゝの志つゝの志つゝの

母曰

志つゝの志つゝの志つゝの
志つゝの志つゝの志つゝの
志つゝの志つゝの志つゝの

女

女

女

女

永平

母師平女
包とんの人月の書とて學
日親玉屋の御

昭平

母在衛女
みんそぬ差其をとて家
いそくよとて

女

母三光女
みんそぬ差其をとて作
の意其は公仁の家いそくの
おとて家系のみ日書り
后より御

女

通信室
みんそぬ差其をとて作

女一文

母師補女
月の家其をわく証や
そとて御

女三文

母在衛女
さゆくの書とて書
の書とて人日書り

女四文

母重明女

女五文

母廣明女
能たれ室とみそぬ差其を
と

女六文

母代明女

女七文

母師情女

女九文

母

月宮ありてきんり虎の
代十一文文玉村とく此
考よと系入るふと

女十文

母

月の宮ありてきんり虎二
年并院とんとの花え
考よとかりふと

女十一文

母

花山院

母

月宮ありてきんり虎
少く永禄二年八月
御位寛和二月八日崩
花考よと

昭登

母

考よとありてきんり虎
考よとありてきんり虎
考よとありてきんり虎
衣玉考よと文信部

清仁

母中務女

長元元年三月十九日御成婚

六文と一

女一之

母

長元元年三月十九日御成婚

女二之

母

長元元年三月十九日御成婚

女三之

母

長元元年三月十九日御成婚

女四之

母

長元元年三月十九日御成婚

三条院

母兼家女

長元二年

三月三日御成婚
長元元年正月十九日御成婚
と云ひしきいふをゆ
てのまゝに崩

為尊親王

母兼家女

長元元年三月十九日御成婚
長元元年三月十九日御成婚
と云ひしきいふをゆ
てのまゝに崩

教道親王

母

藤原のちかると師父なる
秋のきくさくさく

女一文

母 仲平女

月宮あきくさく

女二文

母

赤松院女御紀の巻わく
えはひのきくさく

小系院

母 時女

ちて天皇

久きくさくさくさく
ちてあきくさくさく

教平親王

母

久きくさくさくさく
ちてあきくさくさく

ちてあきくさくさく
ちてあきくさくさく

教儀親王

母

ひきくさくさくさく
ちてあきくさくさく

師明親王

母

久きくさくさくさく
ちてあきくさくさく
ちてあきくさくさく

當子

母曰

いそぎのちとて舟を武村
きくはきふて海東国を
かゝ道雅通所ゆつるの
あそびあそぶうらやま

祝子

母曰

のりらられま

女ご文

母曰

母の長女

朱雀院御はけりたはれ
くしはまわさかして生か
打さくはをかくもれゆつての
あそびあそぶうらやま

頼子

水はあそびて後朱雀院坊の
四時と入向言合そわく
まゝ文の一ふえとあられ
あかりのあそびて後同を
して室紙文陽明院

敦貞

中務文 母の長女

敦昌

母曰

いそぎのちとて舟を武村
きくはきふて海東国を
かゝ道雅通所ゆつるの
あそびあそぶうらやま

敦元

母道長女
い合のきとてうせ給

敦賢

母敦宗女
孝と布川のきとて

女

布川きとて新文曰き
いかりぬ

基子

母曰
松のきとて松をきては後事なり

行宗

松はきとてのきとて葉作とて

孝宗

松はきとてのきとてよおわ曰
き源中ね

女

母いしとての女
松のきとてのきとて後事なり
一和文と作のりし後事なり
同きとて唯三石

信宗

母新り常
布川きとて中ねとて源中
いかりぬとて

女

布川きとて白行院の
新文小作

あま

母みらさの女
あまきとてあまきとて
やとていせ給

女 女 女 女 女

母 彩之女

神谷村石小川宮領主家

母 道長女

宮谷村石小川宮領主家の
おの孫と云ふは、おのの
おのの孫と云ふは、おのの

母 月

母 菊乃女御

母 月

布引石小川宮領主家の
おの孫と云ふは、おのの

基經

時平

保忠

教忠

相信

女

昭宣云

長良の三男良房其女

月のえんの者として下
月あきよ亮う二平九也

八条大納

月宮あきよは即ち備

月宮あきよは中納言と云

みそめを差はるしそ田舎と

月宮あきよは延喜の宮
龍心のかきんし胡芝の宮

相女

みよの女を其女とて
お中へ奉じ

文慶

くらねを少し何周梨同
きしりし

女

顯忠

月の宮を其女とて奉じ

女

重頼

宇多女御

右清の女

元頼

三儀治の女

心養信都

玉の宮を其女とて奉じ
信都

女

布川局を其後三葉院
其女の乳母

仲平

月宮を其女とて奉じ
龜年七年一丸

兼平

月宮を其女とて奉じ
三位とす

忠平

貞信の女
月宮を其女とて奉じ
天曆

三年八月十四日薨年廿七

女いこり

女

實賴

小野文治公

月宮公をかくる左大臣を
かく康保元年十二月十三日
左大臣左大臣小倉融院の
移政同をよ天禄元年六月
十日薨年廿七

教敏

月宮公をかくる

依理

礼山公をかくる
奇合をかくる大貳

女

為志公をかくる

女

つねと礼の老をかくる
の中文つとより物のさし
かたし一人奇合をかくる
けさし

頼忠

彦義公

月宮公をかくる左大臣同日
よ右大臣をかくる長元三年
如法同をかくる
開白同をかくる左大臣

三浦くみきよとして薨る系
大原しり

公任

日兼大納言母代明玉女

三浦くみのきよとて宰相をなす
善美とて中納言のきよ
くみきよのきよとて初代をなす
あまのきよとて長者とて家

女

母曰

北山をふくむゆに北山
天元五三月十日よ辰とて
くみのきよとて大納言と
あまのきよとて家

女

北山院前北山をふくむ

女

重信室

登任

くみのきよとて大納言
あまのきよとて大納言

定頼

母昭平親と女

くみのきよとて大納言
あまのきよとて大納言

良海

母曰良

くみのきよとて大納言

女

女

母日のつらりのさむ

ひまのさむくは海梅のさむ

うせ結年止み也

母日

ひまのさむくは海梅のさむ

娘えとつらりのさむ

うせ結

經家

結合のさむくは年とあり

惣子

てん上のさむくは結合のさむ

結合のさむくは年とあり

女

女

初敏

女

女

ひまのさむくは海梅のさむ

伝長家のさむ

きつりのつらりのさむ

郁子のつらりのさむ

月宮のつらりのさむ

ひまのさむくは海梅のさむ

さむ

村と女御

遠

大宰大貳

實資

小野文

月宮おととて宮頼の考は
海くのをふく宰相見
とておとととて中御を
同考よ御つての女死に候
乃常へかひ候と
さうとて右大將也
この事のはれい下
とれつりの考いふと
孫金とて龜年九千

資頼

布門おととて

女

母今少方

女

布門おととて

懐平

御おととて中御

女

御居室

女

りとの事下れとて
御居室の室
りとの事下れとて

資平

御堂屋あはく大納言これ
まりののきし後兼信院
乃代。皇孫文の位を夫

経仁

母佐理女

元合をてて以奇同局し
赤伝書目をて宰相
孫合のてて皇孫文の位
夫同局あはく中納言

資房

御堂のをて右通少納
言のててのてて以
中納言のてて左大臣
宰相

資仲

これまりののててお
孫合のをててえんの左
中納言まりのててえんを
てて右大臣兼布川の
卷をて中納言

女

布川のをて左納言をて

月のてんのをてて右下

師博

日ま。元徳に五月方家
日字。寛年申さる

三男

おかつのうら

師氏

月宮あり大納言
冷泉院坊の時を三孫
元七月十日卒

師尹

小一条月宮あり
四右大臣同より
安和二十月十日薨年

定時

五位侍從

月のえん

實方

みそね

時

月宮あり
宰相花山より
ちるねけ
薨のよめ

女

村との常

女

忠室

相仁

月宮ありあり
つむぎの

通仁

みくそぬまはくくし田原
いものまをくし大蔵の権中納言

宗覚

月宮あまをくし青毛長命天
をそぬまをくしゆ原同をくし

母延光世

女

みくそぬまをくし三系院
あまの時南宮耀光をくし

みくそぬまをくし信守信光をくし
みくこの月をくしむせ原

女

教道親之家

みくそぬまをくしむせ原

伴半

一系傍政孫流云

月宮あまをくし安和元正月命

同を右大臣同をくし傍政花山

のちあまをくし三上月百歳

年百九

前少将

花山あまをくし辛

後少将

花山あまをくし辛

義孝

三位母懐光女

花山あまをくしみくそぬまをくし

三浦氏中のあまをくし三浦を

はくそぬまをくしむせ原をくし辛

むせ原

行成

實經

源平の争ひの末に身を痛
狭谷の寺にありてありのち

女

袂谷の寺にて住す尾花宮の
母時まつりし人

良經

源平の争ひの末に尾花宮
方合の寺にありし人

行經

山崎の寺にありし人
まつりの寺に宮位ありて
よき家系

伝經

つれづれの寺にありし人

女

細柳宮の寺にありし人

女

長家室

りの末にありし人

女

源平の争ひの末にありし人

義懷

花山寺の寺にありし人
お家といひし人

成房

乃とそぬ友の寺にありし人

延因

陸書に記す飯室僧正

文惠

阿智架

女

冷泉院派

月宮ありて蒲とて花心
おきて皇女御まゝくは
つねのまゝとて世絶る系
大御とす

女

為光室

為高親室

女

高院御九の四宮とす

兼通

堀川女

月宮ありて中宮権室同光
より花心ありて後醍醐
より南白河光仁天延二年より

一

光光

左大臣右大臣より准三后同
土月寛年中二

皇家

花山寺より中御之御の
おきて唐揚中御より
別ありて右大臣同光より
堀川女玉村よりのおきて
厚より御所の系ありて
母村とのゆえ
いづくれ別のおきておね

女

母月

一系院女御

女

みまそねまきくそ入内兼吉
あつねと花のまきくそ
おしひ孫よあゆまぬ

母曰

小糸院世御とみまそねま
きよありまじくそ
あて浦川世流と云りの景
乃まきくそ

朝光

花のまきくそ
なつねと花のまきくそ
まきくそ
三月ちり年

朝経

女重明親と女

こまきくそ人のまきくそ

母曰

花山まきくそ

母曰

花山まきくそ

女

基房

布川まきくそ

女

正光

女

女

女

布川をよ後三条院の
みまのめをよ

りの京にありて

月宮ありて同結院
女清坊川の女御と云はれ
ありて天元二年七月百
后中文日ありて

母の明女

つりて花の后よ三条院の
みまを

云信宮

云をよよ同を

兼家

諸真院月乃宮ありて

多を備同を中納言

ありて三条院大御を

同をよよ同の

大御をよよ同を

同をよよ天元二年大長

の御をよよ同を

よよ同をよよ同を

同をよよ同をよよ同を

同をよよ同を

母の志女

同をよよ同を

信重

女

道徳室

女

乃為室

高亮

みよそねまきよりこれ
別のありし唐揚の室を
海よりりのおとて居ると
月のとんのおとてお物同
おとねおまきよのつと
ほつとつとつとつとつと

女

昭平親との室

みよそねまきよのつと

為元

恒徳云法恒寺住

月宮ありしとをわつと
おとて一東大御をわつと
おとておとつとつとつと
しとつとつとつとつと
年六月十六日薨

誠信

母教敏女よりハるつとつと
おとつとつとつとつと
おとつとつとつとつと
おとつとつとつとつと
おとつとつとつとつと

女

高亮のありしお節と
ありし

歌信

母曰

そら歌のまゝし中を更む村
道はまゝし大酒を飲むの由り
よ任路とま

女

長家室

社合のまゝあり

道信

んぞそねまはれをゆく中ね
月をにる兼のま

云任

みそそねまはれをゆく中ね
けのまゝそね日経ぬゆりてあ
るゆりまのまゝ同日をゆく
まゝまはれまゝのまゝつれまゝ
利高同をゆく室桐の地を

長信

かゝる長信は神津松をゆて
在悉しとままありのらむる
かゝる万三三年六月十日卒
衣むれをゆく歌信のまゝ
るわく石を清とあり

尋覚

りのまはれをゆく法徳寺
の信部

良光

初紀のまゝゆく源信のまゝ
まゝまはれをゆくまゝ

恒子

死すて死に院御在位
女御弘徽殿とて曰也

女

隆家室

みそめを女御とてよまんえ
の御方とていふ

女

ろり死のきく死に院
死とて死に院崩の後
たはけささるた官の
室とていふ

女

つら死のきく死に院
を曰也みく好子作はよ

女

道長の子とていふ

九代御言とていふを女
れ有みく死に院よとて
死後よ有る親とていふ
行とていふ人の、きく
后よけり

實康

母正光女

衣書有みく少おとと
乃ち此とて右京守

保家

女

母心光女

衣玉此女よりし歌伝の言

公基

きつりのしらねあま
まのしり

公孝

仁義公よりいふまゝとて

公のまゝし申物てまゝ
申入るゝそめあはれあま
ゆは申物ておれあま
日長あまのまゝ
公長あまのまゝ
まゝのゆりのまゝ
しをぬる

安子

村と依

月宮あまより天徳二年七月
廿七日依申文とて應和
二年四月廿九日おとせ

登子

村と登子あま

月宮あまより重明
家とありあま
村と天宮の

高明家

女

道徳の家

あまのまゝあま

女

女

甲子のあはれなる女

さうらの別のあはれなる
三位とよみあはれなる
女

世子

冷泉院

あはれなる女

女

あはれなる女

内務

母有明親王女

實成

あはれなる女
同政宰相とよみあはれなる
女

親資

あはれなる女
あはれなる女
あはれなる女

母曰

こまらぬ女

中ね

母曰

東寺一長者女

信覚

如源

母曰

あはれなる女
信長同女

女

母

今そなたを養はれりし一筆流
兼所弘敬殿より候

云成

成王の事にて是等の事
成王の事にて申上候事
成王の事にて申上候事
成王の事にて申上候事

女

成王の事にて申上候事
成王の事にて申上候事

女

成王の事にて申上候事
成王の事にて申上候事

實季

成王の事にて申上候事
成王の事にて申上候事

云實

成王の事にて申上候事
成王の事にて申上候事

頼仁

成王の事にて申上候事
成王の事にて申上候事

女

成王の事にて申上候事
成王の事にて申上候事

女

頼信室

道澄

中開白

三徳くはるし三徳わ
同きよ中物と目せし
長文をす入目せし接
同開白みそそぬ多乃
るし長徳元四月
お家同古丸

道頼

山井大物と母山井永頼
女三徳くはるし中物
入そそぬ多乃のち
中物と兼家の御外
しるは名大千代入目せ

女 女

よそ大物と母屋之年月
十百卒年九五

入そそぬ多乃のみ
玉じしころれあし山
の宮とと安上東門院
作同きよ小一集院
大物とそ作とそ中
そそそのちと頼心
そそあらしそそ同
母三徳
三徳のちとそそ

伴周云

道雅

女

女

隆用

小名をねなよ三信年
 四月廿一日中納言に任ぜり
 大納言に任ぜり四月廿
 二日此の御所に任ぜり
 乃師と名に任ぜり
 御入りつる御所に任ぜり
 母よりしよ母よりし
 小名はしよよと任ぜり
 八月廿一日任ぜり十一月廿
 二日初納言に任ぜり
 准左衛門に任ぜり寛弘七
 年正月廿九日寛弘七年二月廿七

母重光女

兄イそのぬきもあふり
 とも死せしむる義人がわ
 けつてそのまゝに三信を

母月桂家室

小名花ありし也

母月

上東門迄よと御所をたふ

母月

小名は冬にちかか松のまは
 のてちかかかたよと年

隆家

母

隆家、元弘元年、つとむ流
同、元弘元年、つとむ流
元弘元年、つとむ流

頼親

頼親、元弘元年、つとむ流
元弘元年、つとむ流

同頼

同頼、元弘元年、つとむ流
元弘元年、つとむ流

女

女、元弘元年、つとむ流
元弘元年、つとむ流

女

女、元弘元年、つとむ流
元弘元年、つとむ流

女

女、元弘元年、つとむ流
元弘元年、つとむ流

女

三まゝ守心えぬ極し一糸あり
已に行人

一糸流のみりき

ろくそねまよるめじの四方と

あり初花をくしむ病と十七八

良頼

御松をくしむ苑人おねを
あししむる松の志つきの
おとし中湧き

母経房女

布川をくしむ松を

志俊

母曰

きりぬらの志は初花の

家基

志つきの志つし利中松を
同志よるり田のこ

まんの志つきの志つし松を

松の志つきの志つしあさり

親杖

志つきの志つしあさり

女

基平室

経浦

御松をくしむし位か
この上は志つし右中并と

孝定

女

師家

師基

女

くぬりりのをくすまは
らけ布川のをくすまは
大納もくすまは

母為光女

この月もくすまは

教儀親と室

布川をくすまは

大中寺

きりのくすまは

布川のをくすまは

寺文作

道經

兼經

道命

女

西のくすまは
宰相ららのをくすまは
いしものをくすまは
おまは納もくすまは
あてた大納

母雅信女

きりさきのくすまは

ゆつてのるよあは

母信文此友内

敦家

道兼

一男

兼隆

きつりゆららのきよぶね

栗田南白

三浦くみきよとて四位がね
日吉とて大御とていそね
美のきよとて田大后日吉
右大將とて日吉とて南白
日吉とて長徳元六月八日薨

少きつり

三浦くみのきよとて平

母を重女

あきつりゆららのきよぶね

あきつりゆららのきよぶね
とて

あきつりゆららのきよぶね

後平太のきよとて平ゆらら
乃ちゆららゆららゆらら

母を三位一条院御

あきつりゆららのきよぶね
あきのきよとてゆららゆらら
乃ち相伝室

道信室

あきつりゆららのきよぶね

兼信

兼經

女

女

詮子

田融院后

花山寺にて夫人中院御位の
時女御いめつかと安さぬく
のきとて后宮を后宮とて
是とて女御のちとて家内
年可也女院とて長徳三十
二月廿二日とて
三系院まゝいりのゆか
ふゆくのきとて三系院まゝ
のち時内侍月とてまゝいれ
久とて安さぬのきとて
のちお返しとて

綏子

橘内侍

橘内侍のきとて

女

母のきとて

はつとて花のちとて三系院
坊れ内侍みとて同きとて
妍子は作とて

お雅信女

頼道

よとて名とて

初花のきとてえ朕同き
よとてお内侍とて宰相同
きとて三位左衛門とて
花とて大助とて玉村とて

頼宗

乃きそそ左ちね日きそそく
因大臣同右し移政あきり
れそそし用白りよの京此そ
そそ左大臣孫合そそそ藤下
松のそそえ乃きそそしらね
布川そそよ薨そそ一十三

母三明女

しそ八名いそそ

円融院のそそ后文のそそ
初死のそそそ藤のそそ日
そそしおねほおそそそ同そそそ
そそ松のそそ位中ね玉村そそ

教通

そそあて二位中ねゆそそて
のそそあて東文太史同そそ
そそ大納そそそ上のそそそ
そそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそ
のそそよ日大臣同そそそそ

母雅信女

ひそきのそそそそそそそ
そそひそそそそそそそ
乃所あゆそそそそそ
二位中ねあそそそそそ
そそそそそそそそそそ

信家

日暮しをたかきつりのら
りきしをたかおとてし
松の志ろえのるそ同白
を改た信布列れおとて
年八十

母云但女

悔悔を少し大節志とあり
予合志し三位中ね同志し
師言乃志ろくねり所の
るわし中助て被合志し
山井の大助

母曰

予合志しと信はく風つり

信長

乃志よと又信のとりあり
おとて

母曰

予合志し侍従同志し
予信志し予ののらね志し
大助て松の志ろえおとて
日暮布川のるそ同下

母云但女

夜あのをよとねね志ろえ
乃志しこころのそと
布川のるそ入滅

母云但女

被合志しと志ろえ志ろえ
予同志しと志ろえ

信長

信長

生子

母曰

後朱雀院女御

恒悔局少くもくまをくれ
まろりのをまて入内
むろつたれ女御と云孫名
乃をめて居子如所日
おとて唯三女

中姫君

母曰久病

母曰

後冷泉院女御

祇名乃をまて三女

親子

女

資仲室

自河原の母をよいと布川
乃をまて二女

母曰明女

淡々より乃をよと二位由緒局
乃をまて指申納て日をまて
中文大まらけつ所のを
まて皇孫文乃をまて

能信

能長

御誓の巻とてまきいそ
とを祇合れるを申納て
まの巻つえの巻とて
まて文大ま布川をまて
母曰

道子

白河院女御

まろ乃ちつえんをよむ布
川のきくに三后よりひ
ふ記のゝるよみ兼文と
りてふりあふ

後三条院女御

松れきつえのきよと
頼家のきよ同きあふ
堀川の女御と云同き
あてたりあり給

茂子

孫信

母

ひまのきよと横川と
お家同きよとじり
日とむしとむまのりり
乃きよと大原の入石と
日るり卒

長家

母

ゆつてのきよとまの
と後をりれきよと中ね
同きよと頼道のきよ同
頼乃るよと三位中ねと
乃ららめきよと中ねと
りよれきよと中ねと
よはら乃ららめきよと

一男

氏子として名を合せしむ
程大納言とれりりしの
おとそ中文字をまかり
の後のそとて卒

母 藤信女

衣玉のちそ生やそ卒

道家

くらりりのそと卒

忠家

まかりの後にそとて大納言
布川おとそとそ大納言

女

布川のちめて伝書れ
御多し月をそと白河院
女御代

祐家

まかりの後にそと二條お
同おとそと宰相

女

母 一男 月

衣玉のちそと藤信女
まかりのちそと伝書
のそと

彰子

母 雅伝女
一条院御

そとそつそとそとそと

元年十一月一日十二日
入日く届く取つかの書
とP同書として紙中
写るる紙のあり大書と
P漢文のありを
右文を玉をてし世後同
書として百三正月
九日お家上東の流と
年正九月布川書
兼保元年十月
く世後年八十七

妍子

母月
三系流伝

くお花のありて四條の
く三系流伝の御時日
書して四條日書して
と書していよまれば
中書と書しての書
まじりて書して大書
書してひんを
くりれるおく
如給同書として
九月五日よ

威子

母曰

後一善院作

いんぎふ此書より後多院
防乃御時の田邊法全り
乃書きて世世同きまゝ
名三ついふひれき此を
お家おるし書こしおる

嬉子

母曰

後朱在院内作

あまふとち此をいづる
御時より田邊りの事
乃書し世世法全の由
所くれるし書こし

女

母曰明女

小一条法女御

玉じつさくのあそ小
一善院防の四時女御代
ゆつての書きて書
山井の女御と名々その
月あわく石曰をそ
う皆法

女

母

師房室

かきくひのちしるも業
のちあしうせ給年八十余
土御門のちあいのしるも

兼頼

えん上のちあく三位中ね
う合をよそ宰相中将

俊家

ま各あよそ中ね孫合あ
し二位中ねさすのちあ
えのちあし西かて布川の
をよそ右大臣同をよそ
薨

宗俊

孫合のちあしるあ

師兼

同をよそしる

女

松のちあえのちあしるあ
布川のちあし師房のちあ

基貞

う合をよそ但守孫合
ああくみのちあきありの
のちあしるあしるあ

基長

あありの後をよそ
かお

女

師実室

布川孝子と上東つぼよ

中納言君と作

能孝子

おしづとてはあまの運命を

布川の孝子とては川乃

中納言とあり

女

母伊同云女

小一条流女御

乙上の孝子とてはの上と

延子

母曰

後朱雀院流女御

後悔局とて一条の二品と

昭子

の御やうい月局とい

まいけいといとて実をい

乃差れりといはれぬ

後三条院女御

通房

母六の御方

身が校のあまを長女御

といつるれをやうの孝子と

中納言とてはあまの孝

子とては大納言といをよと

なれりといの孝子

卒年未詳

師實

京極接政

母三條のり

奇合のきくはかお孫合

のきくして中納言同書

として大納言同書として日

大倉きりりの後ろきん

大ね同書として右大臣松

のきくえのあとして左衛

布川内をきくして開白

ひくき此のきくきく

接政

母山井のり

俊鑑

宗鑑

忠鑑

女

玉村きくろあよきや
年

母道彦同

とんりのきくきく

母三條上

孫合きくして之服

母日

後冷泉院孫宮子と申孫合

きくして百后下加孫天皇

孫文四孫文と申

母師房女

布川をきくして三條中同書

として左大臣同書として内侍

布川をきくして師實同書として

師道

忠實

宗忠

ひらたのふと約後日
るそ少の目三位中納言
中納言
母頼國女
布川をよそ少の

師実

母基貞女
布川をよそ少の

能実

母月
同をよ見極

忠教

母小少の
後合をよ見極

静忠

布川をよそ少の
任給とあり

女

母基貞女
布川をよそ上東門前の吉
ひらたのふと少の
女房代

延光

月宮ありと右道少の
同をよ少の枇杷大納言
花山をよ少の卒

女

母教志女

月宮ありて何時の室

成志

何れくのをきし言三位乙
何れとみそねをきだる
いづれをよと率

明順

いづれ列ありて奇とを

道順

信順

いづれをよとありしもの
きつてのるを思ふ

清昭

貴子

道澄室

花山後言内かみそねを
のきそと后より結ぶ
の列のきそとありて人

津守為基妻

女

補道

津守為基

有國

いづれをよとありて
そねをきだるを宰相
乃列のきそと大武初段の
きそと有宰相

丹波守

凡そねあはれしよ

良成

いふれあし

女

皇定室

匡衡

大江
尾後守

举固

一條院藏人 大江
善定侍

成衡

相方志の志
右衛門乃信

匡房

能宣

大中臣

補親

奈之

